

# 刻む会

## たより

No. 13

1995.12.28

長生炭鉱の「水非常」を

歴史に刻む会

(代表) 山口 武信

宇部市常盤一丁目九(陣内)

☎〇八三六(二二)八〇〇三

### 「刻む会」の

### これからの活動

代表 山口 武信

国会の戦後五十周年決議は結果的にはかえって韓国、中国など日本周辺のアジアの諸国を中心に日本への新たな疑惑を抱かせ、度重なる閣僚の心ない発言は、村山首相の発言ともども日本人の反省の無さと、歴史認識の甘さをさらけ出してしまいました。今年に敗戦後五十年目にあたり、私たち「刻む会」にも、釜山からテレビ局の取材があり、韓国からの新しい接触がありました。他にも、日本人の旧長生炭鉱関係者で新しく証言される人が現れました。また、当時の西岐波村関係の文書の閲覧により新事実の発見がありました。

十二月二六日は、嶺野さんと山口の二

人で県国際交流室に次の二点について接触をもちました。

記

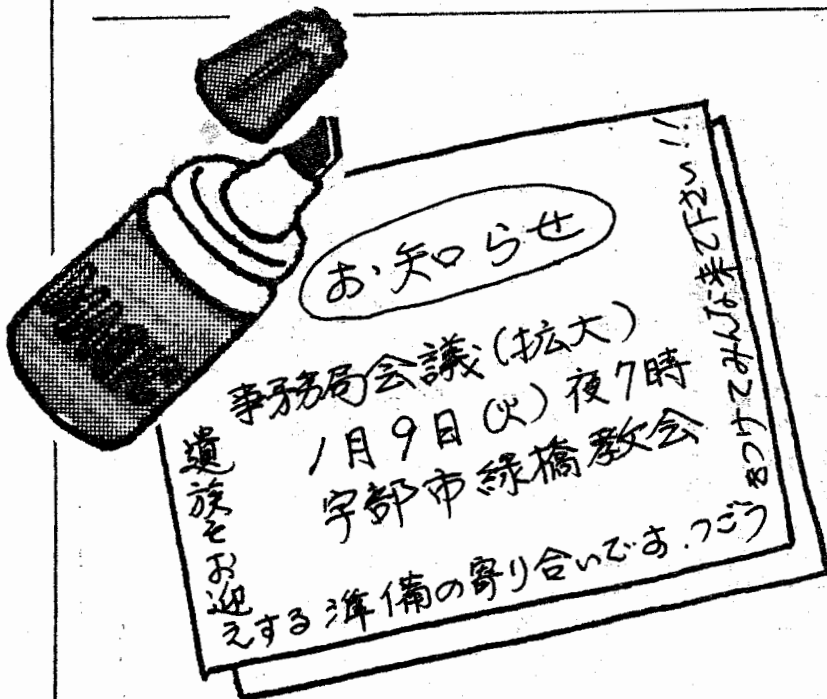
一、県を通じてまだ私たちの手に入っていない韓国の長生炭鉱犠牲者の除籍謄本の入手をすること。

一、長生炭鉱のピーヤの山口県近代産業遺跡の指導を受けること。

どちらも困難なことですが、今回を一回目として、次いで関連諸部課との交渉をしていきたいと思っておりますが、「刻む会」では、まだ碑を建立すべき用地の獲得についても前進を見ていません。本の出版については、嶺野さんが「資料の整理」をしながら準備をしておられますが、今少し時間がかかりそうです。

一九九五年は「長生炭鉱の「水非常」について、テレビや新聞などで幾度か報道ぎ、今までは風向きが変わったのではないかと思われていますが、本当に関

心があるのは、ほんの一握りの人々だけで、宇部市民の中にも長生炭鉱の名前さえも知らない人達があります。  
一九九六年は、二月三日の追悼集会に続いて、五月下旬頃中国地区強制連行・強制労働についての交流会を山口県でもつ予定になっています。この会が宇部市民と山口県民全体の支持を得られるよう、努力を重ねて市をも県をも動かす力にして行きたいと思えます。



# 戦後五〇年目の夏

事務局 陣内厚生

今年の夏、七月八月、長生炭鋳をめぐって、いくつかの動きがあったので、以下にご報告したい。

◆七月一日(土)朝、釜山外国語大学校教授の金文吉氏より電話が入り、長生炭鋳を調査するために小野田まで来ているとのこと。私には面識はないが、以前日本で在日大韓教会の牧師をしておられたらしい。翌二日(日)大雨の降る午後、事務局に金氏が訪ねて来られた。山口代表ら二、三人のスタッフが対応し、長生炭鋳についてのいくつかの資料を用いて説明した。氏はこの問題を学問的に検証し、本国で発表したいと望んでおられる。また釜山のテレビ局に取材させたいので、その下見も兼ねて来られたということだった。

◆七月十六日(日)釜山のテレビ局PSBより四人のスタッフが、金文吉氏と共に来宇。約束の時間より二時間も遅い到着だったのでヤキモキしたが、長生海岸の炭鋳跡の風景や西光寺の位牌などの撮影、「刻む会」のメンバーたちへのインタビュー、資料収集を積極的にこなしていく。翌日も

現場や山大工学部研究室、石炭局などを取材して回っていた。聞けば、本国で八月十五日の「光復節」、戦後五〇周年記念日に長生炭鋳問題の特集し放映することのこと。放映後にビデオを私たちの会にも分けてもらうことを頼んで、お別れした。

◆私が私用で宇部を数日離れている間の七月末、二人の韓国人青年が長生炭鋳のことを学ぶために来宇、会のスタッフが案内した。来年、強制連行ゆかりの地をツアーを組んで研修の予定だとか。

◆八月一日(火)、かねて計画し宣伝していた夏のフィールドワーク「宇部の歴史を学ぶ会」を開催した。何人ぐらいの市民の参加者があるのか不安であったが、私たちスタッフも含めて、総勢四〇名が集まった。親子連れの参加も多い。午前九時半より西光寺で位牌を前に解説と学習。続いて炎暑の長生海岸に移り、現場の説明。そして最後は花一輪ずつを全員で海に投じ、黙祷して解散した。真夏のイベントだったので、四〇名というのは先ず先ずということか。参加者からの感想は概ね好評である。

◆八月二十二日(月)事務局会に、「アムネステイ・インターナショナル」の韓国ソウル・グループのメンバー二人(金さんと海さん)が来訪された。二人はこの会で長生炭鋳の事故を初めて知り、私たちの運動が続けられていることについて大いに感激された。早速、翌日は予定をずらして現

場を見てみたいというわけで、わがスタッフが案内した。

◆八月二十八日(月)夜、釜山のキリスト教の牧師さんたち八名が宇部に到着された。「同胞の苦難の現場訪問」ツアーとして、三、四〇代の超教派の牧師たちで組まれたものである(団長の禹氏は日本通の長老)。当初一五名と聞いていたが、福岡ユニバーシアード大会と統一協会の合同結婚式のおおりで、八名分しか飛行機の席がとれなかったとか。残念である。二十九日(火)朝、一行は宿舎から宇部緑橋教会に直行。日韓両国語で合同の祈禱会がもたれ、短時間の有意義な交流を共有し合った。続いて一行は西光寺を訪問し、山口代表らにより説明を受ける。さすがに熱心な質疑応答が交わされたが、時間を気にしつつ長生海岸へ向かう。この日も暑く、炭鋳跡の残骸をくまなく回った時には汗だくだった。あのPSBテレビの八・一五の長生炭鋳問題特集の放映を、全員が見ているらしいので、話がより深く浸透したに違いない。昼はレストランの中華料理で、刻む会のスタッフも加わり交流を楽しむ。午後は次の目的地広島島へ向かわれるので、山口代表らと共に小郡駅までお見送りした。

以上、多忙で幸いな夏を体験したわけであり、感謝の他はない。

『それでも生きた』ビデオ上映と

朴美津子さんの講演会

去る十一月十九日、宇部のシルバーふれあいセンターにおいて、『それでも生きた』日本軍の性奴隷にされた女性たち』のビデオ上映会を開催し、ビデオ上映のあと、ビデオ製作団体である「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会」の元代表の朴美津子（ハク ミジンジャ）に講演をして頂いた。シルバーふれあいセンターの真新しい会場に、五十名もの参加者が集まり、ビデオに見入り、講演に聴き入った。

ビデオ『それでも生きた』には、「従軍慰安婦」問題がトータルに描かれていた。「慰安所政策」の背景となる民族差別の問題と女性差別の問題を明治以降の日本の侵略史を掘り起こすところから語られていた。日本は、中国をはじめとするアジア侵略の過程で「慰安所政策」を行うのであるが、明治以降の朝鮮侵略と表裏一体の関係として朝鮮蔑視、民族差別があったことを解き明し、そのことが、大量の朝鮮人女性が、「慰安婦」にさせられた理由だと説明されていた。

また、戦前の公娼制度に代表されるよう

に日本社会は、女性差別を制度として温存しており、そのことが、日本軍が「慰安所政策」なるものを発想する背景なのだと告発していた。あとの講演で朴さんが「戦後補償問題の中で、慰安婦問題が最後に出てきたのは、強姦された女性が訴え出れない社会背景と同じだ」と述べられたのだが、「慰安婦」問題と女性差別の問題を鋭く表現している。

更にビデオは、勇気をもって日本政府を告発した元「従軍慰安婦」の方々の現在の姿と、日本政府の全く責任を取ろうとしない態度を対比させるかのように描くことで、日本政府の不当、かつ、非人間的な対応にたいする元「慰安婦」のおばあさんたちの怒りが、自然に伝わってくる内容だった。

講演では、日本政府の終始一貫した無責任さを説明し、民間基金（「女性のためのアジア平和国民基金」）も、責任なし、補償なしの問題解決にはほど遠い代物であることを明らかにし、真の解決を訴えかけていました。また、もと「慰安婦」のおばあさんたちは、自分の告発がいかに意味あることかを自覚し、尊厳をもって生きていることを報告し、朴さん自身もその十分の一で

も自分のものとして運動を続けていきたいと話を締めくくられました。

今回、歴史に刻む会として、「従軍慰安婦問題」のビデオ上映会に取り組みましたが、長生炭鉱の「水非常」と根底ではつながらている話だと感じました。現在まで、なんら問題解決されてないところも同じで、これが日本の現状なのだつくづく情けなく思います。一歩でも前に進めるよう頑張ってくださいと思います。

11.19 「おんこも生きん」ビデオ上映と講演会

